



2003年 8月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

2003年8月
第39号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

漢点字講習用テキスト（初級編 第1回-2）	1
東洋医学について（最終回）（小池上 惇）	1
連載「点字から識字までの距離」（36）（山内 薫）	3
私とボランティア活動、漢点字について（前半）（平瀬 徹）	7
「点字毎日」掲載記事より	9
漢点字と私（岡田 健嗣）	10
ご報告とご案内	15
漢文のページ	21
平野久美子と短歌鑑賞	23

東洋医学について (最終回)

小池上 惇



九 治療法



(一) 随証療法

東洋医学における診断の結論を証といいこの証に基づいて治療が行われます。このことから東洋医学は「随証療法」と呼ばれます。

(二) 標治法と本治法

東洋医学の治療のうち、現れた症状に対して行われる治療を標治法、全身調整療法を本治法といいます。根本的に、全身のゆがみを調整する本治法が理想的な治療法ですが、急性症の場合は、先ずその症状をとることも必要なので、普通は本治法と標治法を併用することが多いよ

うです。これを標本同治といいます。

(三) 補瀉

補瀉とは東洋医学の治療の根本で、補とは足りないものを補うことで、虚証に用いられます。瀉とは余分なものを、害になるものを取り去ることで、実証に用いられます。東洋医学の治療法のうち鍼は瀉法、灸は補法といわれていますが、それぞれに補瀉の方法があります。例えば、鍼では細い鍼や金鍼は補法ですが太い鍼や銀鍼は瀉法です。灸では小さな艾しゆは補法、大きな艾しゆは瀉法となります。また、按摩では摩が補法、按が瀉法となります。

(四) 治療原則

ア 虚している場合はその母を補う。
肺経が虚している場合は、肺経（金）の母である脾経（土）に対して補法（按摩ではなでること）を行います。





イ 実しているときはその子を瀉す。

肝経が実している場合、肝経（木）の子である心経（火）に対して瀉法（按摩ではもむこと）を行います。

（五） 治療法の種類

ア 按摩

中国から日本に伝わってきた治療法で古法按摩の手法には調摩の術（軽擦法）、解積の術（揉捏法）、利関の術（運動法）があります。

イ 導引

導引按摩として古くから中国で行われていた保健および健康療法です。導引は運動法と呼吸法を指し、按摩は按摩や気功療法の基になったものです。

ウ 鍼灸

東洋医学における物理療法の主体となるもので、灸は北方から、鍼は南方から起こったといわれています。

エ 湯液

東洋医学における化学療法で主に煎じ薬を用いました。材料は草根木皮で剤形としては煎じ薬のほか、散（粉）薬、丸薬、膏薬もあります。

最近、西洋医学にも限界があることが分かり、東洋医学の効果も見直されてきています。東洋医学の特徴である全身調整法や未病治、本法などの優れた点を取り入れられ西洋医学と東洋医学が共存し、日本の医学が更に発展することを期待しつつ、この連載を終わらせていただきます。

長い間読んで下さった読者の皆様に感謝いたします。



点字から識字までの距離 (36)

山内 薫

(墨田区立緑図書館)

純粹失読

話を聞いたり、喋ったり、そして文字を書いたりするのは何の障害もないのに文字を読むことが出来ない、そんな障害がある。それは丁度目にする文字全てがアラビア文字の世界に突然飛び込んでしまったようなものだという。文字を書くことは出来るにもかかわらず、自分で今書いた文字が読めない、そんな「書けるのに読めない」障害を取りあげた『純粹失読』(土本亜理子著 三輪書店 二〇〇二)という本が出版された。この純粹失読というのは脳梗塞や交通事故などによる脳の損傷によって引き起こされる高次脳機能障害の一つで失語症の中の一つとされる。

高次脳機能障害とは、話す、聞く、読む、書

くなどに障害が現れる「失語症」、一つのこと
に注意を集中したり、多数の中から必要なこと
を選んだりすることが困難になる「注意障
害」、古い記憶は保たれているのに新しいこと
を覚えるのが困難になる「記憶障害」、ちよつ
とした困難でも著しい不安を示したり、興奮し
て衝動的になったりする「行動と情緒の障
害」、空間の片側を見落としてしまう「半側空
間無視」、生活上での必要な情報を整理し、計
画し、処理していくという一連の作業が困難に
なる「遂行機能障害(前頭葉障
害)」、食事の時にスプーンやフ
ォークをどう使って食べたらいいか
かが分からなくなってしまうな
ど、手足は動かすことが出来るのに意図した動
作や指示された動作を行うことが出来ない「失
行症」、身体の一部を自分の物でないように思
ったり、麻痺があるのを認めない「半側身体失
認」、よく知っている場所で道が分からなくな
ったり迷ってしまう地理や場所についての障害
である「地誌的障害」、目に見えているの色や
物の形、物の用途や名称が分からない、知って
いる人の顔を見ても誰だか分からないなどの症



状を示す「失認症」などがある。(同書の資料「高次脳機能障害の理解のために」東京都健康局医療サービスマ部医療サービスマ課のパンフレットより)この内、脳血管障害では六割以上が失語症で、頭部の外傷では失語症は一割に留まり、記憶障害が六割を占める。

純粹失読はこの失語症の内、純粹に読むことだけに障害が表れるものを言い、既に一八九二年にフランスの医師によつて症例の報告がなされている。患者の一人は話し言葉の障害はないが読み書きが出来なくなつた人で、その患者は一般に言語野であるといわれるブローカー領域やウェルニッケ領域は侵されておらず、脳の左半球にある角回に脳梗塞があつた。そのためこの医師は左の角回が読み書きの中樞ではないかと考えた。その後、話し言葉にも異常がなく、文字を書くことも出来るのに文字を読むという機能だけが損なわれた患者を解剖したところ、左後頭葉の視覚野を含んだ内側に脳梗塞があつた。このことからこの医師は純粹失読は視覚情報を受け取る後頭葉の視角野と角回を結ぶ神経路の切断によつて起きると説明した。現在では左脳の後頭葉から側頭葉にかけての視覚に関

する領域が脳梗塞などで壊れてしまうと脳の右半球だけで物を見ることになり、右半球で見た視覚情報を左半球の言語領域に送り込む経路が脳出血による病変などで途絶えてしまい、視覚情報と言語とを結びつけることが出来ない。つまり文字が読めないという現象が起こると説明されている。

この純粹失読において日本語では仮名と漢字で読みの障害に差異があり、脳においては漢字の読み取り方と平仮名の読み取り方が違うのではないかという「二重神経回路仮説」という説をとなえている学者もいる。この仮説は「読むためには、まず文字を見る。文字を脳の視覚領域でとらえ、それから文字の音の特徴を記憶している聴覚領域が関わる。角回を介して視覚から聴覚に変換する『音韻読み』の過程と並行して意味理解が先行する『意味読み』の過程が存在し、意味読みの過程は左側の側頭葉後下部の領域を介して営まれている」という仮説である。

しかし最近では、この純粹失読は「文字の視覚的形態から音韻への変換の障害」ではなく「視覚処理過程の初期の文字識別レベルの問題

である。「とも言われ、先の漢字と仮名の問題にしても個人的な差だという意見もある。純粹失読者の回復過程を見ると、一人一人違っていて、非常に個人差があり、漢字の覚え方一つにしても個々人の脳の関わっている場所が違うという。ただ純粹失読の人は一字一字指で文字をなぞる「なぞり読み」をすると理解ができる。これが読めないけれども書けるということと繋がっていて、書くことを覚えるときには、書くための手の動きや書くときの運動の記憶が脳の中に形成される。従って書けない文字は運動の記憶が形成されていないためになぞっても読めないということになる。

この本のはじめには脳内出血のために純粹失読になった人の五年間の記録が載っていて興味深い、その人が発病三年目に視覚障害者向け活字読み上げソフトを使うというくだりが出てくる。これは新聞記事など書かれた物をスクリーンで読み取って、必要な部分を範囲設定し、読み取らせたデータをパソコンに取り込んで、音声で出力するというもので、固有名詞など必ずしも100%正確に読んでくれるわけではないが、文字から情報を得ることのできない人にと

っては、大きな福音になったようだ。この人の場合には記憶障害も合わせ持っていて聞いた側から忘れてしまうので、何度も繰り返し聞かなければならないようだが、自分なりに工夫して、長そうな文章だと、当たりをつけて黒丸か句読点を入れて切って読ませるようにすることで理解しやすくなったという。

今回の純粹失読に関する本を読んでいて先ず思ったのは、この連載でも何度か取りあげたことのあるデイスレクシア（読み書き障害）という障害も純粹失読と非常に共通の症状を含んでいて、やはり以前ご紹介したマルチメディア・デイジー図書などが有効ではないかということだった。また読む事に関してすべての人が同じように決まった脳の部分を使っているわけではなく、人によって様々な読み方をしているということは、当然触読によって文字を読む視覚障害者にとっても同様で、これも前に紹介したところのある本によると、点字を読んでいる視覚障害者の大脳皮質を局所的に刺激すると後頭葉を刺激した場合が他の部分を刺激した場合に比べて点字読みの正確さが落ちたという実験から、「これらの現象は、十五歳までに失明した場合

に認められ、比較的長い臨界期を持つことも判明した。これらのことから、長期にわたる視覚入力遮断にもかかわらず、視覚野が機能性を保っていること。また、触覚弁別能力処理が、その本来の入力をうける領域以外のところ（視覚野）で処理されることが示された。「脳の可塑性と進化」『認知科学の新展開一認知発達と進化』頁一三九〜一四一 岩波書店 二〇〇一（所収）という。つまり触読である点字の読みに関しても視覚野が読みに関わっているということになるのである。

さらに、書けるけれども読めないという部分では、本書の次のような専門家の発言（岩田誠 東京女子医科大学付属脳神経センター所長）が非常に興味深い。「キーボードの位置は覚えても、それは文字を覚えるのに

は役に立たない。文字を書く際の運動というのは、人間の感覚の記憶、運動の記憶を形成するのにすごく大事だと思います。手の運動



というのとは大事な記憶として残るんです。たとえば日本語の文字は最後に止めたり、はねたり微妙な部分が、たくさんありますよね。はねるべきところをはねないと別の字になったり。そ

ういう書字の運動の記憶の形成は、一つ一つは小さいものですが、その人の人生にとつては大事なものになると思うんです。

視覚的には似ている字でも、運動が違ふ。運動としての記憶があるから、たとえば視覚として文字を識別できなくなった純粹失読症者も、先ほどいったようになぞり読みをするとその文字が理解できる、ということにもつながるのだと思います。（本書一三二頁）これも、以前拡大写本を手書きで書くことの意味について、この連載で述べたことがあるが、数年前に国語のカリキュラムから硬筆書写がなくなってしまうたり、学校教育の中にパソコンが導入されるようになって、文字を手で書くということが学校のみなならず社会からどんどん追いやられていく。

携帯電話のように親指だけが文字を生産するというような事態が一般化しつつあり、文字を身体の動きとして記憶・体得する人が減っていく危険性があるだろう。

そうした時、もしかすると言葉に関する脳の中の仕組みが変わってしまうのではなからうか。

私とボランティア活動、 漢点字について（前半） 平瀬 徹

「ちよつとお小言を申し上げます。あなたの点字はとても汚くて読みにくいですね」という年賀状を、毎年のように盲学校の担任の先生から頂いていました。今考えると、その先生方の点字の分かち書きが本当に正しかったかどうか：。小学部の先生は点字を教えないといけないので点字の読み書きができて当然だと思ふのですが、中学部・高等部の先生の中には、他の先生に試験問題を点訳してもらったり、全盲の先生の墨字の問題を作る代わりに点字の答案を読んでもらう、ということが日常茶飯事だったようです。

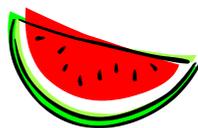
盲教育がそんな状況なので、ボランティアの方々のほうがきれいな点字を書かれます。十年に一度くらいの割合で、国語審議会の答申に合わせて点字表記が改訂されていますが、視覚障害者は無関心な人が多く、最初に覚えた点字表

記を通している人が多いのです。墨字でも、きれいな字の人や達筆すぎて読みにくい文字、漢字が多い人、カナが多い人とさまざまなので、点字にもいろいろな表記があつて当然なのかもしれないませんが：。

そんな私が点字が好きになり、点字表記にも拘りを持つようになったのは、小学部五年生の担任の先生の影響が大きかったと思います。その先生は、夏休みに本を一冊移してくるようという宿題を出されました。でも、そのおかげで

私は読みやすい点字の分かち書きが腑に落ちたと感じたのです。どう力を入れれば疲れずに点字を長時間打ち続けられるかも分かりました。その先生は、一日の授業を全部読書に当てて下さったことがあつて、夢中になつて「ハイジ」や「ああ無情」を一日で読んでしまったという記憶もあります。

中学生になつて、生徒会活動で予算書や決算書などの議案や文集を作る機会が多くなりました。当時はパソコンや点字プリンターはなかったので、亜鉛の板を二枚重ねて専用の製版機で点字を打ち、プレスして資料を作っていました



た。先輩から、分ち書きを勉強するために点字表記法を買って読んだほうがいいとか、視覚障害者関連のニュースを知るために、点字毎日を読んだほうがいいとかいろいろアドバイスを受け、実行に移しました。(中学生から点字毎日を読んでいる人って、どれくらいいるのかな！)

その点字毎日に、「名古屋の点訳サークル六つ星会が、ポールモーリアのピアノ楽譜を点訳して販売し始めた」という記事が掲載されました。私は幼いころからエレクトーンを弾くことを趣味にしていました。エレクトーンとピアノは違うけれど、点字楽譜を販売し始めたということに興味を持ち、早速注文しました。



点字楽譜とともに、「手書きの点訳資料が摩耗してもいいように、また早く読者にお届けできるように、転写して下さる視覚障害者のボランティアを募集しています」というお便りが入っていました。点訳ボランティアの方々がありがたいなあと思うことがあっても、まさかお手伝いできることがあるとは夢にも思わなかったので、早速問い合わせをしてみました。そうし

たら「地元に住んでるなら出てこいよ」と言われ、それから六つ星会の活動に参加するようになったのです。

転写は遠方の人にも頼めるから、お前は校正をやれと言われ、朝から晩まで声が枯れるまで読み合わせをしました。

将棋検定の問題の校正をしていて間違いを見落としてしまい、叱られたこともありましたが、ボランティアとはいえ、大切な試験のお手伝いをする以上、責任ある活動をしなければならぬ、二人で読み合わせするだけでは何となく通りすぎてしまうこともあるので、原本との照合は一人でやらないといけないということを痛感しました。

生徒会活動で点字製版のノウハウもあったので、手書きのものを製版して多部数作るお手伝いもしました。

六つ星会は昭和二十年代から活動している点訳サークルですが、手書きの点本を名古屋市立鶴舞中央図書館点字文庫に納めるのが主な活動でした。そこで、点字出版を主に行い、視覚障害者に直接点訳資料を届けたいと思う有志が別れて発足したのが大樹会です。

(次号後半へ)

「点字毎日」掲載記事より

左は、「点字毎日」二〇〇三年七月二〇日号に掲載された記事です。同社のご厚意によって転載させていただきます。

《本文は、投書への回答の形式で掲載されています。投書の内容は、『点字毎日』を漢点字で読めるよう希望しているが、未だ実現していない。この四月から電子版の配信が始まったので、それに合わせて漢点字版の配信も期待したが、裏切られた。》というものでした。漢点字に関する要望ですので、本会とも関わりのないものではないと考えて、ここに転載致します。なお、投書主は、元徳島県立盲学校教諭・米原清司氏です。また本会においても、『点字毎日』を、漢点字の電子版で配信されることを期待して参りましたが、これは、本文にありませんように、経済的な障害をクリアしてのことです。本会が提唱している読み取り専用データ「EIBファイル」や、KGS（株）の発表になる閲覧専用データ「BNTファイル」が、技

術的にそれをクリアできているものと考えて、提案したものです。》

点毎から

米原さんの手紙とともに、署名捺印をした五十通を超える手紙が同封されていました。それぞれに「点毎の漢点字版を発行してほしい」「漢字かな交じりのデータを提供してほしい」という切実な声書きつづられて、その思いが伝わってきました。確かに漢字は日本文化の中で大きな位置を占めており、皆さまのご意見は良く分かります。教育の中での位置づけをはじめ、私たちにとつても今後の課題の一つであることは間違いありません。

ただ、点字毎日は民間の新聞社の一部門として公的な援助を受けておらず、あくまでも皆さまの購読料や様々な印刷物による収益で運営しております。企業である以上、点字毎日で行っているそれぞれの事業は、常に「収益性」という観点を交えて検討して行くことが求められます。情報提供をしながら購読料によって情報収集にかかる費用や人件費など経費をまかない、

経営の安定につながる努力が不可欠となります。それには情報提供と購読料の関係やそれを結ぶシステムといった問題、必要な人員と設備といった様々な課題をクリアすることが重要となります。四月から開始したデータ配信はこうした購読システムを含めた形で運用が可能となったわけです。

不況下で民間、公的機関を問わず「収支の見通しとバランス」が厳しく問われる時代ということは皆さまもご存じかと思えます。そうした現実の中では、収支の見通し、業務量、機械設備、購読システムといったトータルな検討が必要となります。様々な課題に優先順位をつけながら検討を加え、より良い情報を提供したいと考えますのでご理解下さい。なお漢字かな交じり文のテキストデータの提供につきましては、すでに「アットニフティ」の会員の方向けに提供していますのでご利用下さい。（編集長・眞野哲夫）

【この稿は、日本漢点字協会の機関誌『新星通信』（二〇〇三年八月発行予定）に寄稿したものです。同協会のご了解の元に、転載させていただきます。】

漢点字と私

横浜漢点字羽化の会 岡田 健嗣

横浜で、漢点字ボランティア・グループの代表を務めています岡田^{おかだ}健嗣^{たけし}と申します。

この度、「新星通信」のサロンの欄に、何か書いてはというお勧めをいただきました。

しばしお付き合いいただければ幸いです。

(一) 私の漢点字歴

私は、一九七九年に、川上先生の『漢点字解説』を終了しました。そのようにして、初めて漢字の世界に触れることができたのでした。

漢点字の存在を知ったのは、その前年のことだったと思います。漢字の世界を知らぬまま盲学校を出て、かなりの年月を過ごしていました。現在でもほとんどの視覚障害者が、漢字を知らぬまま、仕事をし、家庭を営んでいます。

どれだけ心細い思いでいるか、想像に難くありません。

一九九二年から、ボランティアの皆さんにお願いして、漢点字訳書の製作を始めました。

国内のあちこちに、このような活動が育って行けば、漢点字の資料が増えるばかりでなく、その存在も知られて行くと考えたからです。その活動の拠点も、現在は横浜に置いています。本会のボランティア会員は、皆、大変熱意を持って活動して下さいます。感謝に堪えません。

(II) 私にとっての漢点字

私や漢点字使用者の多くは、漢字を学べないまま成人して社会に出たのですが、そういうところが、日本人にとって何を意味するか、現在の我が国では、ほとんど問われることがありません。従って、そのような問いを発したとしても、その本当の意味に気付いて下さる方は、極めて希です。

しかし、故・川上泰一先生は、この漢点字を、私どもに残して下さいました。先生のこの

お仕事は、何にも替え難いものです。私ども漢点字の恩恵を享受している者は、このことをよく受け止めなければなりません。

どう受け止めるか、私にとっての漢点字が、どんなものだったのか、少し振り返ってみます。

(III) 漢点字のトレーニング

取り分けて「漢点字」というばかりでなく、言葉の習得には、それなりのメソッドが必要です。残念ながら漢点字についてのメソッドは、川上先生のお残しになった、『漢点字解説』だけです。より多くの方々に、漢点字を我がものとしていただくには、色々な角度から、その学び方の検討が必要です。もし先生がお元気であったなら、色々な工夫をなさったに違いありません。

私にとって幸いだったことは、漢点字訳の最終段階に参加できたことでした。当初から、「朝日歌壇・俳壇」の漢点字訳に取り組んでいました。そこに難読語を見付けては、注を付けたのでした。その作業が、図らずも私に、大変

有効なトレーニングになったのでした。日本語のリズム、日本語の呼吸が、定型詩から散文へと、共通する基盤の上に構築されていることが、徐々に分かるようになって来ました。そんな風にして、私は、否が応でもトレーニングに励むことになりました。このようにして、復元のトレーニングを経て初めて獲得できるものがあつて、それは疎かにできないものだということが、身に沁みたのでした。

また、この作業の副産物として、難読語の資料も沢山収集できました。現在EIBRROWのWという、電子辞典に結実しています。

(四) 羽化の会の活動

横浜漢点字羽化の会は、漢点字書を製作することを中心に活動しています。漢点字訳には、本会開発の、EIBRROWという漢点字変換プログラムを使用して、コンピュータで行っています。

このプログラムは、基本的にはテキスト・データを、漢点字仮名交りの電子データに変換して、点字プリンターに送出するものですが、レ

イアウトの調整を目的にした編集機能が充実して来たため、エディタとして使用されることが多くなりました。

また、視覚障害者にとっても、点字ディスプレイをモニターとして使用することで、音声モニターと相互に確認しながら、編集作業ができるようになっていきます。このことで、多くの視覚障害者が、漢点字書の編集に参加できるだけでなく、当初の目的とは反対の、漢点字文のモニターを見ながら、テキスト・データを作成できるといふ、大変有効な機能も獲得できました。

(五) EIBファイル

本会からの提案

漢点字は本来触読用の漢字です。本会の活動も、それに添ったものとして位置づけて来ました。

ところで、今般の著作権法の改正によって、点字の文書に、ハード・コピーばかりでなく、電子データも含まれるようになりました。これ

は、点字ディスプレイの普及によって、点字文書のペーパーレス化を勘案したものと解されま
す。一つの方向としては大変結構なことですが、
これまで残念ながら、漢点字にはそのような
電子データに相当するものはありませんで
した。

そこで昨夏、本会では「ローローファイル」と
いう、漢点字の電子データを発表しました。こ
のコンセプトは、リード・オンリーのファイル
で、EIBRKRWという、読み取り専用のプ
ログラムで、点字ディスプレイと音声を使用し
て、文書を読むことができるというものです。

このローローファイルを流通用のファイルとすれ
ば、漢点字の電子図書館も夢ではありませ
んし、雑誌の類などの電子出版も、安価なコス
トと量的な制限の緩和によって、可能性が大幅
に増します。実際本会では、本会が製作した漢
点字書は、ローローファイルで提供できるよ
うになりました。そしてその、読書用のプ
ログラム・EIBRKRWは、無料でお配りして
います。

さらに、株式会社RQの社様のご厚意で、こ
のEIBRファイルから、同社の点字モニター、
BM16SE（ブレイルメモ）とBN46X用

の、閲覧専用のRQローファイルへの変換が
できるようにしました。この閲覧専用のRQロー
ファイルを送り込むことによって、この二機
種を、漢点字の読書器として利用できるよう
になりました。

このような情報は、本会機関誌『うか』に、
随時掲載しています。活字版、テープ版、デ
ィスク版（ローローファイル）の用意があり
ます。購読は無料です。

（六） 点字毎日を漢点字で！！

以上のように、漢点字の電子データが完成
しますと、より多くの文字情報を、漢点字で
読みたい、という欲望が出るのも当然です。

この四月から、点字毎日では、同誌の電子
版（カナ点字）を発刊しました。

上記のように、技術的には漢点字でも同
様のサービスが可能になりました。しかし、
これを現実にするには、多くの障害が予想
されます。

この予想される困難を克服するには、漢
点字使用者の熱意を凝集して、たつての希
望として、同社に届けることと思いま
す。私には、決して

閉ざされた道ではないと信じられます。これには私たちに課される最低条件が二つあります。

一つは、KGS（株）製の電子読書器、BM10SEか、BN46Xをお手元に置いていただくこと、もう一つは、必ず点字毎日を購読することです。公的な文書が漢点字で提供されることが実現すれば、今後の漢点字をめぐる環境は、大きく変わって来ることでしょう。

この三月に、機関誌『うか』と電子メールで呼びかけましたが、残念ながらごく僅かのご賛同を頂戴したのみでした。漢点字使用者の熱意を届けるには、あまりに少数でした。

またこの呼びかけに呼応する形で、「購読するかどうかは個人に任せよう、署名・捺印した名簿を同社に送り付けて、漢点字使用者の力を見せよう」と言っている人が現れました。

私は、単に実力行使で勝ち取るという考え方を採りたいとは思いません。購読するということを前提に、漢点字で書かれた公的な文書を手にしたという、切実な希望を形にして行くことが、最も大切なことで、漢点字を読まない、読めない人たちの声まで、空手形として導引することになれば、それは暴力に他ならないと考

えるからです。

(七) 結び

川上先生が逝かれて、来年で十年になります。この間、漢点字をめぐる環境は変化しています。決して樂觀できる状況とは言えませんが、問題点を整理して見ることは必要なのではないかと考えます。まずは、好転して来たことを一つ挙げて見ましょう。

視覚障害者がコンピューターを使用することが多くなって、バリア・フリーにさらされる機会が増えた。これは、一見コンピューターで読み書きの幅が広がったので、漢点字など必要ななくなったと言われることの多い事象です。しかし実際は、漢字の知識を持たない者にとつて、自力で漢字仮名交じり文を読み書きするという困難にさらされることを意味しています。言い換えれば、漢字の知識への渴望は強まって来ている、そしてそれへのニーズは、潜在的には、より高まっている、と見てよいと思われます。しかも、視覚障害者が漢字を学ぶためには、触読できる漢字の体系が必要だ、そういう認識が、徐々に浸透しているように感じられます。

次に、より困難になっていると見られる点を挙げてみましょう。

漢点字の独習は、大変困難です。というより、文字の独習は、大変困難なものです。従って、現在勉強されている皆さんを、どのようにサポートして行くかが問われています。

もう一つ、「二つの点字の漢字の存在」と言われることがあります。役所などに行って漢点字のお話をしますと、必ずこの問題が出て来ます。そして先方から、「これは当事者の皆さんで話し合って解決していただかなければならないことです。その後、役所としても、点字の漢字をどうするか、考えることとなります。」と言われます。これは、実に見事なまでに手足を封じられた形です。

さらにもう一つ、漢点字を標榜しながらも、漢点字を読み書きしない人たちがいることです。そのような人たちがなぜ漢点字を唱えるのか、大変疑問ではありますが、読みも書きもできない人が漢点字を口にするのは、漢点字の信頼に関わることもあります。

以上の問題は二つに見えますが、根は一つと見てよいでしょう。そしてその解決策も一つ、

私たち漢点字使用者とボランティアや支援して下さる皆さんが、日常的に漢点字を使って、漢点字の優秀性を訴えることです。日常的に使用している、その姿を見てもらうことです。

そのようにして、川上先生が創案されたその目的である読みと書きを、皆さんとともに実践することが、遠回りのようで、最も近い、漢点字普及の道と考えます。

「報告とご案内」

一 漢点字講習会について

去る六月一五日に、横浜市のご後援を得て、本会初めての「漢点字講習会」をスタートしました。オリジナルのテキストを使って、通信制を中心に進めて行く予定です。



講習会の様子

テキストの概要

テキストは、以下のように編集しています。

(1) 初級編と中級編に分けて提供します。初級編は、川上先生の言われる〈基本文字〉とそれを部首とした文字（このテキストでは〈複合文字〉と呼びます）を交互に出して、漢字の構成と漢点字の構造を対照できるようにします。なお〈基本文字〉とは、六書で言う「象形文字」と「指事文字」に当たる文字で、これ一つで文字であつて、しかも、他の文字の構成要素となるものを言います。漢点字ではこの中に、「会意文字」と「形声文字」の一部も含まれます。〈複合文字〉とは、六書で言う「会意文字」と「形声文字」に当たる文字です。〈基本文字〉を部首として構成された文字です。

(2) 初級編に収録される文字数は、九百字前後の予定です。〈基本文字〉の大部分と、教育漢字の大部分を含みます。ここで言う教育漢字とは、手元の資料（昭和四十四年版）に従うもので、現在の小学校では、千二百文字余りを教えていると聞いていますので、かなりの隔たりがあり

ます。しかし、文字の数としては、常用漢字の約半数に当たりますので、一つの区切りには、ちょうどよい数ではないかと考えます。

中級編では、初級編に収録できなかった僅かの〈基本文字〉の後、残りの〈複合文字〉を、音読みの五十音の順に掲載します。「形声文字」が、漢字の八十パーセントを占めますので、中級編では、この「形声文字」の説明に注力することになります。

(3) テキストの内容は、「見出し文字」、「音読み、訓読み」、「その文字の形」、「その文字の表す意味」、「漢点字の点字符号とその構成」、「その文字の含まれる熟語」の順に掲げます。

二十字前後まとまったところで、「読みの練習」と「書き取り問題」がありますが、この「書き取り問題」にお答えいただいで、次のステップに移っていただきます。「読みの練習」の前に、よく知られている歌の歌詞が入っていますので、お楽しみ下さい。

一回分は八十字前後の予定です、その中は、四つないし五つに分かれています。その最後に、それ

まで出て来た文字が、どのように使用されているかを、実際の文章で味わっていただくために、短い文章を掲げます。

(4) テキストは、点字版と墨字版を用意します。視覚障害者の皆さまには、お近くの晴眼者の方にご相談していただきながら学習できるように、晴眼者の皆さまには、点字の表記がどのようなになっているかをご確認いただけるよう、同じものをお渡しします。



点字版では、最初は全てをカナ点字で表記し、徐々に出て来た漢点字を使用するようにしました。墨字版では、最初は全てを墨字で表記し、徐々に出て来た漢点字を、墨点符号で表すようにしました。

講習の方法

講習は、通信を中心に行って行く予定です。そして、隔月毎にも、スクーリングを行う予定です。受講者の皆さまには、それぞれのペースに従

って学習を進めていただけるよう願っております。

受講者の皆さまには、ご質問・ご要望等、お気軽に、ご遠慮なくお申し出下さい。

現況

来る九月十五日(月、敬老の日)に、二回目のスクーリングを行います。一回目はオリエンテーションと位置づけましたので、スクーリングとしては、初回とも言えます。

受講者の皆さまには、「習うより慣れる」の気持ちが一番大切、川上先生の言われた「忘れて覚えろ」の精神が、漢点字習得の早道、急がば回れでやって下さい、と申し上げております。ゆっくり、ゆっくり取り組んでいただいて、確実にゴールしていただけるようお祈り申し上げます。

講習およびオリシナル・テキストに対する反響

その後、受講の希望が届いております。特に、地方の方からの問い合わせがございました。通信講座へのご参加を考えております。開始時、終了時は、受講者の皆さまが決めることで、ご希望

は、何時でも受け付けております。
テキストに対する関心も、多方面から寄せられております。これまで漢点字のテキストと言え、川上先生のお残しになったものだけでしたが、今後は、多くの方面で、試行錯誤される必要があります。できることならば、主教材と副教材くらいは揃えて、お子さまにも馴染める漢点字であることを、実践したいものと考えております。



テキストの音訳

本誌の読者のお一人から、中途失明者の方のために、本会のテキストを、音訳して欲しいというご希望が寄せられました。

早速本誌テープ版を製作して下さっている皆さまにご相談致しましたところ、大変厚意を持って受け止めて下さいました。皆さまお忙しい中、深く感謝申し上げます。

墨字版が完成したのから、ご相談して、製作していただく予定です。テープ版にも、ご希望をお寄せ下さい。



二 漢点字用の点字器

現在手に入る、漢点字用の点字器は、三種あります。

(1) 懐中定規…日本ライトハウスで製作・販売しているものです。プラスチック製、四行書き、一行・三二マス。価格は、三〇九〇円です。お問い合わせは、

社会福祉法人・日本ライトハウス視覚障害リハ

ビリテーションセンター

〒五三八・〇〇四二

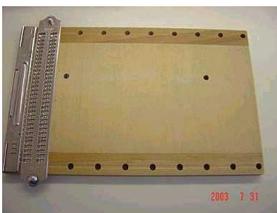
大阪市鶴見区今津中二・四・三七

TEL〇六・六九六一・五五二一

(2) 点字板…仲村点字器の製作・販売する点字器です。片面書き、一七行、一行・三二マス。

価格は、一八、〇〇〇円です。お問い合わせは、

株式会社・仲村点字器製作所



点字版



懐中定規

〒一六五・〇〇三二

東京都中野区鷲宮一・一四・三

№〇三・三三三八・一三八四

(3) テラタイプ・野視障機器の製作・販売するブレイラーです。コンパクトな、形態に便利な点字タイプライターです。漢点を打ち出すときは、始点・終点を左右の親指、一・二・三の点を、左手の人差し指・中指・薬指、四・五・六の点を、右手の人差し指・中指・薬指に当てて、キーを同時に打ち込みます。

両面書き、片面一三行、一行・三二マス。

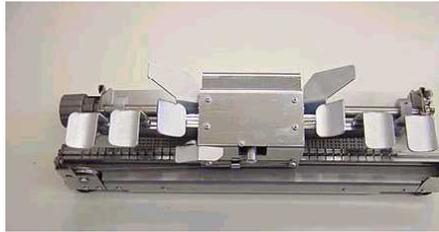
価格は、六九、九〇〇円です。視覚障害者の日常生活用具の指定を受けています。お問い合わせは、

有限会社・長野視障機器

〒三八〇・〇八〇三

長野県長野市三輪六・九・一七

№〇二六・二三四・五三九四



テラタイプ

本誌にも転載致しましたように、毎日新聞社の発行になる点字毎日では、漢点字使用者からの、同誌の漢点字の電子データの配信の要望に対して、七月二〇日号に、ご覧のような否定的な回答を掲載されました。このこと事態は大変「遺憾」と申さなければなりません。

本会では、本誌でもご報告して参りましたように、漢点字の電子データ・ホームページを昨夏発表しました。これは、著作権法の改定によって、点字の情報の範囲が、電子データにまで拡張されたことを受けてのことです。漢点字の電子化によって、より多くの情報が、漢点字で、視覚障害者の手元にお届けできれば、一般の社会で、同じフィールドで、仕事をして行かなければならない皆さまにとって、大きな力になるに違いないと考えての開発でした。



この延長線上に、今回の点字毎日への要望を位置づけて、同誌の漢点字の電子版の配信を要望することを、この三月に提案しました。KGS(株)のご協力を得て、技術的な困難もほぼ克服できましたので、漢点字使用者の皆さまのご賛同をいただければ、決して不可能ではないと考えて

三 点字毎日の見解について

おりました。

しかし、この記事にもありますように、本会の提案へのご理解に至らぬまま、「署名」を以て、要望を提出されました。このことは、点字毎日編集部に対して、早急の回答を求めたことになり、してみれば、このような回答が返されるのも必定で、本会が提出した技術的・経済的なコスト管理に基づく要望でなかったことが、公の回答を引き出してしまったという、誠に皮肉な結果となった次第と理解されます。

本会と致しましては、このようにして、公の文書に漢点字が採用されるというチャンスは遠退いてしまったとは言え、数年先を視野に入れながら、同様の機会の到来に備えて行きたいと考えております。

漢点字使用者の皆さま、並びにボランティアおよびご支援の皆さま、ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

Ⅳ EIBRKWのインストール 漢点字直接入力について

このほど、日本漢点字協会をはじめ、多くの漢点字使用者・漢点字訳ボランティアの皆さまか

ら、EIBRKWに、漢点字直接入力のご要望をいただきました。

EIBRKWは、元来、テキスト・データを漢点字データに変換するために開発されたプログラムです。そこには、テキスト・データの作成に関するコンセプトは、存在しませんでした。それは、一般のワープロ・ソフトで作成することを前提にしていたからです。

ところが、EIBRKWの機能の拡充によって、EIBRKW自身がエディタとしての機能を獲得することになりました。そのために、漢点字使用者の皆さまから、入力に対する要望が、浮上して来たというのが、今般の状況です。

かなりの困難が予想されますが、本会と致しましては、決して拒絶するものではありません。が、それが実現できるものか、現状では何も申せません。皆さまの暖かいご理解とご支援を賜れば幸いに存じます。

（ご意見・ご感想は、左記のURLへ）

E-MAIL : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL :

<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>



早^ニ發^ス白^ス帝^ス城^ヲ

李白^{リハク}

朝^ニ辭^ス白^ス帝^ス彩^ス雲^ヲ閒

千里^ノ江^ノ陵^ノ一^ニ日^ニ還^ル

兩岸^ノ猿^ノ聲^ノ啼^{イテ}不^レ住^マ

輕^ク舟^ヲ已^ニ過^ッ萬^ノ重^ノ山

早^{ツト}に白^{ハク}帝^テ城^ニ發^{ハツ}す

朝^{アヒタ}に辭^{ハク}す白^{ハク}帝^テ彩^{サイ}雲^{ウン}の間^{カン}

千里^{センリ}の江^{コウ}陵^{リョウ}一^{コウ}日^{ニツ}にして還^{カエ}る

兩岸^{センリ}の猿^{エン}聲^{セイ}啼^ナいて住^ヤまざるに

輕^{ケイ}舟^{シュウ}已^スに過^スぐ萬^{マン}重^{チュウ}の山

朝早く、朝焼け雲のたなびくおり、白帝城に別れを上げ、千里もある江陵までわずか一日で帰ってきた。(途中)兩岸の猿の声がしきりに聞こえてきたかと思いうちに、舟足の軽やかな小舟はたちまち幾重にも重なる山々の間を通り過ぎていた。

獨^リ坐^ス敬^ス亭^ス山^ニ

李白^{リハク}

衆^ス鳥^ノ高^ク飛^{ビテ}盡^キ

孤^ク雲^ノ獨^リ去^{ッテ}閑^{ナリ}

相^テ看^テ兩^{ツナガ}不^レ厭^カ

只^ニ有^ル敬^ス亭^ス山^ニ

獨^シり敬^{ケイ}亭^{テイ}山^{サン}に坐^ザす

衆^{シウ}鳥^{チョウ}高^{コウ}く飛^ヒびて尽^{キン}き

孤^コ雲^{ウン}獨^{ドク}り去^クって閑^{カン}なり

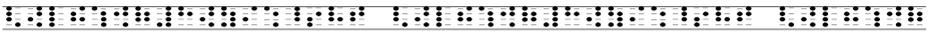
相^{アイ}看^{カン}て兩^{リウ}つながら厭^{アヘ}かざるは

只^{ケイ}敬^{テイ}亭^{テイ}山^{サン}有^ユるのみ

たくさんの鳥は空高く飛び去っていなくなり、ぼつんと浮かんでいたちぎれ雲もどこかへ行って、あたりはのんびりと静かである。(その中で)たがいに見詰め合ったままどちらとも相手に飽きないものは、ただ敬亭山があるだけである。

※ 遠藤哲夫『語法詳解 漢文』(旺文社)、『要説 漢詩』(日栄社)を参照しました。





早ニ白帝城ヲ發ス

朝ニ辭ス白帝彩雲ノ間

千里ノ江陵一日ニシテ還ル

兩岸ノ猿聲啼イテ不ル

ニ住マ



輕舟已ニ過グ萬重ノ

山

* 「間」は、JIS第1・第2水準外の漢字です。

獨り敬亭山ニ坐ス

衆鳥高ク飛ビテ盡キ

孤雲獨リ去ツテ閑ナリ

相看テ兩ツナガラ不ル

ハ厭カ

只ル有ルノミ敬亭山

おもむろに 磯におちたる 浪の音



ゆふ風なぎ 海の 汐のふくらみ



中村 憲吉



夏休みには海へ行く人も多いことでしょう。日中あれ程にぎやかだった海も、夕ぐれ近くなると俄に浪の音に気が付きます。

おもむろにとは、ゆっくり静かに、そろそろ、ゆるやかに等という意味です。

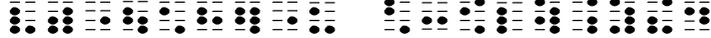
おもむろに磯におちたる浪とはどんな浪でしょう。沖からゆったり寄せてきて、ゆるやかな浪頭となって磯に落ちるのです。その音をききながら作者は夕風ぎの海の汐がふくらむのを感じています。

豊かな海の夕風の香のするような一首です。

切実に 死後のことなど 思ひしが



ひもじかりせば 鍋に物煮る



左本 道子



ひもじとは空腹であるという意味です。

作者は切実に死について、死後について思っていたのです、いた筈でした。「ことなど」という表現も含めて何か少し投げやりな感じがしますが、それが作者の若さをも感じさせます。若い頃は真剣に生や死について考えるものなのです。けれども生きていくという事実、お腹も空くのです。そう気付くのです。結句「鍋に物煮る」という書き方、ボンと事実だけを投げ出すように書いた作者の心の動きがよく出ています。

初句「切実に」と詠みはじめているだけに余計に際立ちます。

編集後記

《表紙絵 岡 稲子》

小池上惇先生の『東洋医学について』が本号で最終回となります。今、若い女性の間で東洋医学が注目されています。女性誌に特集が組まれるほどです。本誌を見て「興味がある」との声が多く聞かれました。

又の機会がありましたら是非、若い世代の購読者増加の為に連載をお願いしたいと思います。

ありがとうございました。

次回の発行は10月15日です。 宇田川 幸子

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。

漢点字 講習用 テキスト

初 級 編 第一回（全十回）

横浜漢点字羽化の会 2003年6月15日

第一回

2 基本文字（2）

第一基本文字（1）

〈第一基本文字〉とは、一マスの漢点字です。〈一マス漢点字〉とも呼ばれます。

この点字符号をカナ点字で読んだときの50音順にご紹介します。

まずは、漢点字の基本的なパターン「𠄎」から。

(1) 目 𠄎 モク め

漢点字の基本的な形です。墨字は、目の形に由来しています。部首となって、目に関する事、見ることを表す文字の要素になります。

「𠄎前」 「注 𠄎」 「𠄎覚まし時計」

(2) 糸 𠄎 シ いと

細い「いと」の形に由来した文字です。紡績、織物、縫製など、いとに関わる幅広い意味を持っています。部首の「いと偏」として、多くの文字の要素となります。

「絹 𠄎（きぬいと・けんし）」 「𠄎口」 「𠄎 𠄎 𠄎乱れず」



(3) 糸_三 ケイ つな - ぐ つな - がる

墨字では、「糸_三」の上に小さなノの字が付いた形です。つなぐ・つながるの読みと意味があります。漢点字では、〈第二糸偏〉として、二つ目の糸偏に用いられます。糸偏の文字が沢山あるからです。

「_三統」 「_三図」 「_三列会社」

(4) 比_三 ヒ くら - べる

墨字では、人が二人並んだ形で、カタカナのヒを横に並べた形です。ひかくする・くらべるの意味があります。漢点字では、後で出て来る、〈比較・文字〉の符号「_三」として用いられます。

「_三較」 「_三対」 「背_三べ」

(5) 数_三 スウ かず かぞ - える

数を数える、沢山の数の意味があります。漢点字では、漢数符「_三」として用いられます。

「_三学」 「算_三」 「_三え歌」



(6) 家_三 カケ いえ や

屋根のある「いえ」です。漢点字では〈ウ冠〉として、建物に関係する意味を表します。

「_三屋」 「_三族」 「_三主」



(7) 宿_三 シュク やど やど - する

人が寝起きする建物です。漢点字では〈ウ冠、ワ冠〉として用いられます。

「𠄎泊」 「𠄎舍」 「下𠄎」 「𠄎屋」

(8) 学𠄎 ガク まな - ぶ

屋根の下で、子供が勉強している形です。漢点字では〈ツ冠、ナベツタ〉や他の冠として用いられます。

「𠄎校」 「𠄎問」 「科𠄎」 「𠄎舎」

(9) 言𠄎𠄎 ゲン ゴン い - う こと

口を開いてものを言う形を表しています。部首では、〈言偏〉になって、言葉に関する意味を表します。

「𠄎明」 「発𠄎」 「𠄎葉」 「𠄎い訳」

(10) 語𠄎𠄎 ゴ かた - る

墨字では「言偏」に「吾」の形です。言葉を発して話をすることを表しています。漢点字では、〈第二言偏〉として、二つ目の言偏に用いられます。

「𠄎𠄎」 「日本𠄎𠄎」 「英𠄎𠄎」 「物𠄎𠄎」

(11) 頁𠄎𠄎 ケツ ページ

大きな頭を表しています。部首としては〈おおがい〉になります。

(12) 貝𠄎 バイ かい

海の生物のカイです。古く中国で、貨幣に子安貝の貝殻が使われていたことから、財産や交易に関わる文字に、〈貝偏〉として用いられます。



カイの名前の字には〈虫偏〉が多く用いられます。

「𧈧𧈧殼」 「𧈧𧈧卷き」 「𧈧𧈧𧈧枚」 「𧈧𧈧子安」

==== 近似文字 (1) ====

(1) 真𧈧𧈧 シン ま まこと

「目𧈧𧈧」の〈近似文字〉です。まこと、本当の、実際のの意味があります。

「𧈧𧈧実」 「𧈧𧈧写」 「𧈧𧈧𧈧っ直ぐ」 「𧈧𧈧𧈧っ青な空」

(2) 面𧈧𧈧 メン おも も おもて つら

む-ける

「目𧈧𧈧」の〈近似文字〉です。カオ、あるいはカオに付けるメンです。また、カオを向ける、おもて、広く平らなものの意味があります。

「表𧈧𧈧」 「𧈧𧈧積」 「水𧈧𧈧」 「𧈧𧈧変わり」



(3) 云𧈧𧈧 ウン い-う

「言𧈧𧈧」の近似文字です。蒸気が立ちこめている状態を象った文字です。多くの文字に、部首として含まれます。

「𧈧𧈧𧈧𧈧」

(4) 首𧈧𧈧 シュ くび かしら

「頁𧈧𧈧」の〈近似文字〉です。アタマの形を象った字です。人のクビ、人の上に乗ったもの、人を束ねる人などの意味があります。

「𠄎𠄎相」 「元𠄎𠄎」 「𠄎𠄎筋」 「𠄎𠄎っ玉」

(5) 具𠄎𠄎 グ つぶさ そな - える

「貝𠄎」の〈近似文字〉です。何かをしたり作ったりするときに

使うもの、何かのために、こまごまと用意するものの意味があります。

「𠄎𠄎𠄎」 「道𠄎𠄎」 「𠄎𠄎体」 「𠄎𠄎合」

読みの練習 (2)

- (1) これに着𠄎してください。
- (2) 𠄎標は𠄎𠄎𠄎店です。
- (3) トラは食肉𠄎ネコ科です。
- (4) 金に𠄎𠄎はつけない。
- (5) 𠄎巻きの形が𠄎偏になりました。
- (6) 母𠄎社会の動物は？
- (7) 我が𠄎の𠄎𠄎を調べる
- (8) 𠄎喩がとてもうまい人がいる。
- (9) 𠄎𠄎では正𠄎例というよ。
- (10) 小𠄎と分𠄎はどう違う？
- (11) まりつきをしながら𠄎え歌を歌ったものです。
- (12) 名所旧跡𠄎𠄎あれど…。
- (13) 𠄎𠄎𠄎が𠄎𠄎ぱいで狭い。
- (14) 書の大𠄎が𠄎いました。



雅



- (15) あの方は良^{三三}の出です。
- (16) 自然の風を取り入れた^{三三}こそ理想です。
- (17) ^{三三}題早くやりなさい。
- (18) 品川の^{三三}に泊まる。
- (19) 夜になると葉に露が^{三三}る。
- (20) ^{三三}芸会は小^{三三}校でしていました。
- (21) 私は多くのことを^{三三}びました。
- (22) ^{三三三三}は難しい。
- (23) ^{三三三三}道断ですよ。
- (24) 大きな声で^{三三}います。
- (25) 昔、^{三三}霊信仰があった。
- (26) ^{三三}気荒く話す。
- (27) 単^{三三}をつなげて文章にする。
- (28) その地方には^{三三}り部がいた。
- (29) 書物の^{三三三三三三}を^{三三}と^{三三}います。
- (30) ^{三三}塚を掘って昔の生活を知る。
- (31) ^{三三}殻を、ばいかくと読む。
- (32) あの人こそ^{三三三三}の^{三三}者だ。
- (33) ^{三三三三}相は分からない。
- (34) 紙を^{三三三三三三}角に切る。
- (35) その話は嘘か^{三三三三}か？
- (36) 初めて対^{三三三三}した親子。
- (37) ^{三三三三}立ちが似ているね。
- (38) ^{三三三三}の皮が厚い。
- (39) ^{三三三三}尾良くいった。



- (40) 𠄎𠄎席で卒業した。
- (41) 𠄎𠄎筋が美しい。
- (42) ここは実験器𠄎𠄎が多い。
- (43) 装身𠄎𠄎とはアクセサリーのことですね。
- (44) わけを𠄎𠄎に説明しなさい。

書き取り問題 (2)

- (1) わたしのしわざです、めんぼくありません。
- (2) ほんのもくじをつけましょう。
- (3) かもくは、いくつ、しゅうりょうしましたか。
- (4) かわべで、つりいとをたれる。
- (5) きんし・ぎんしのおびはよそゆきです。
- (6) わたしは、ぶんがくけいのにんげんです。
- (7) ぼうけいだから、このかいしゃではしゅっせするかどうか…。
- (8) かれは、ひるいなきひとだ。
- (9) やまのたかさをくらべてみよう。
- (10) なわとびのかいすうをつけましょう。
- (11) わたしが、かずをかぞえる。
- (12) これをおえるのには、すうねんかかります。
- (13) ねずみのいっかは、やねうらべやにすんでいました。
- (14) りょうけをだいひょうしてはなす。
- (15) いえに、はやくかえりたい。
- (16) いぜんのながやには、おおやさんがいた。
- (17) とうかいどうのしゅくばは、いくつあるの？



- (18) きょうはこのやどにしよう。
- (19) うつくしいほしがやどる。
- (20) このがくせいは、てんもんがくをならった。
- (21) こうがくしんにもえて、まなんでいる。
- (22) よげんしゃがあらわれた。
- (23) たごんは、むようですぞ。
- (24) いうはやすいがおこなうは…。
- (25) ちちおやにことづけをよろしく。
- (26) いまは、がいらいごがおおすぎる。
- (27) とうとうと、かたってきかす。
- (28) けつがんをページがんともいうそうです。
- (29) やまぶしがほらがいをふく。
- (30) らでんは、かいをちりばめたものです。
- (31) びょうしゃが、しんにせまっている。
- (32) まごころこめてかんびょうする。
- (33) きみには、まことにかんしんしました。
- (34) しらすで、おもてをあげる。
- (35) おもぎしはそふそっくりです。
- (36) せいふしゅのうが、ここにくるのだ。
- (37) かんじのぶしゅは、やまほどある。
- (38) くびをあらってでなおしたまえ。
- (39) それはようぐばこにしまうものだ。
- (40) さあ、つぶさにはなしましょう。

